続いている。時々ルートを見失いヘッドランプで赤布を確認する。少し明るくなった頃、小ピークに達した。この時私は、2388m峰と思った。この時間に着けば順調だ。ピークよりやや左に派生する尾根を下る。しかし登らない。吹雪の中、見え隠れする尾根はどうもハッキリしない。様子がおかしい。反対側の尾根を偵察したがスッキリしない。再びピークに戻り地図と磁石で確認。

その時、栗原が「ここは奥丸山では？」と言う。「エーッ！まさか！」しかし、地形は奥丸山そのものだった。中崎尾根の分岐は悪天候とヤミで分からなかったのだ。分岐はすぐ分かった。ここからラッセルは更に深くなり、胸まで潜りながら時には泳ぐ様に進む。ワカンを持参するべきだった。

槍は遠かった

この頃よりガスが切れ時々青空が見える様になる。どうやら回復の兆しが見えてきた。正しい2388m峰に着くと幾つものテントが見られた。この辺りをBCにするパーティーも多い様だ。天気はすっかり良くなり待望の槍の穂先も見える。そしてここからのアルプスは何と雄大なことか。「すばらしい」の一言だった。順調に登る。次第に風が強くなる。稜線に雪煙がドンドン上がる。妹尾が遅れる。無理もない、彼は1年半振りの山行とのこと。それに最近太った。一昨日も足が「つった」ので荷物を分けた。

心配されたJ・P（ジャンクション・ピーク）の登りは思った程悪くなかった。ただし夕方、雪が氷化しない前に通過したい。千丈乗越に着く。モーレツな風が吹く。大槍、小槍から生き物の様な雪煙がなびく。妹尾がひどく疲れたのでトップでがんばらせる。時計が11：30を回った所で大休止して今後を打合す。肩の小屋に正午まで着きたかったが無理だろう。タイムミリットを12：30と想定して、とにかくもう少しがんばる。ここが登頂か否かの正念場であった。

槍に立つ

20分程歩いて山田、私は肩に達しようとしていたが、妹尾が遅れ、栗原、藤巻と分かれてしまった。コルで食べたり、写真を撮ったり待つが一向に来ない。モーレツなブリザートの中、目をこらすと3人登って来る。ここは一応「栗ちゃん」にまかせ我々は出発する。槍の登りは「雪が多く」悪くなく、簡単に頂に達した。登山を始めて20年、あこがれの頂であり、「冬の槍に立つ」は目標の一つでもあった。しかし「槍に立つ」といっても、実際は強烈な風が吹きまくっているので、ヒザをついてウロウロしている。天気は快晴で360度の展望。北穂高にものすごい雪煙が上がる。8ミリを回し、写真を撮り下山すると、途中で栗原、藤巻に会う。妹尾は肩の小屋とのこと。一緒に下山していることを伝え別れる。2人は数分後頂に立ち、感涙にむせび堅い握手をしたそうだ。

小屋で妹尾と合流する。北鎌で事故が2件あったと聞く。3人で下山し、J・Pで山田に後続の2人を待ってもらう。2人で中崎尾根を下り、途中飛騨沢に入る。残照に光る北穂、滝谷、奥穂が印象的だった。BCに戻り、雪にうもったテントを再建し終わる頃、3人も戻った。今日は夕食も質素で、アルコールも無かった。

さあ下山だ

1月2日（曇）

〈タイム〉起床2：45出発ー白出沢6：30ー新穂高8：15ー三島20：30

昨夜は静かな夜のうえ、12時間も歩いた疲れのためか、山田が声を掛けた2：45までグッスリ眠った。ヘッドランプをつけ下山。滝谷避難小屋から白出沢まで3ヶ所に中規模の雪崩の跡があった。1月3日松本の山岳会から電話があり、雪崩の情報を欲しいとのこと。その後の新聞では、このデブリの下に2名の登山者が埋没していたらしい。天気は下り坂でまた雪が降ってきた。（文中敬称略）

（87年8月27日発行機関誌「くろゆり」第15号に収録）

解説

数年後、北鎌尾根の安全な下降ルート偵察を兼ねて中崎尾根を選んだが、実際登ってみて下降は問題なかった。この年A隊は大滝山、C隊は鳳凰三山、D隊は金峰山、瑞牆山、E隊はA隊と一緒に燕岳に登り、合宿延参加人員は、19名を数えた。